

地理歴史・公民科

- 事例 1** 日清・日露戦争時代の各国の思惑を考察する
～ 風刺画を核として複数の資料を比較、関係付ける ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 47
- 事例 2** なぜ沖縄戦は民間人を巻き込んだ激戦になったのか
～ 複数の資料を分類・関係付けて考察する ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 55
- 事例 3** 第二次世界大戦後の占領期を考察する
～ GHQ、日本の指導者、日本国民の立場から ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 64

研究協力委員

栃木県立小山北桜高等学校	教諭	佐々木 誠 一
栃木県立足利南高等学校	教諭	高 野 友 博
栃木県立真岡工業高等学校	教諭	小 柳 真 弓

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	大 石 務
----------------	------	-------

○歴史における思考力について

高等学校学習指導要領において、地理歴史科の目標は、以下のとおり定められている。

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』において、地理歴史科の目標の中の「我が国及び世界の形成の歴史的過程…についての理解と認識を深め」させるということは、主として歴史（世界史と日本史）の学習内容を示したものであるとされている。そして、「我が国の形成の歴史的過程については、世界史的視野に立って、我が国を取り巻く国際環境（世界の歴史）との関連で理解させ、また世界の形成の歴史的過程については、諸地域世界の歴史と相互の交流・結合の歴史を通じて大きな流れを理解させるとともにそれと我が国の歴史との結び付きを考えさせこれらを通して歴史的思考力を培おうとするものである。」とある。また、地理歴史科の目標の中の「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う」というところは、地理歴史科がその学習を通じて目指す最終的なねらいを示していると考えられている。

世界史、日本史におけるそれぞれの科目の目標は、以下のとおりである。

世界史 A

近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

世界史 B

世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

日本史 A

我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け、現代の諸課題に着目して考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

日本史 B

我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

どの科目においても、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とあるように、歴史的思考力を培うことを目標としている。

『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』では、「日本史 B」の「3 指導計画の作成と指導上の配慮事項（3）諸資料の活用について」において、「歴史は資料を基にして叙述されるものである。「日本史 B」の学習では、その目標で我が国の歴史の展開を「諸資料に基づき」総合的に考察させることが明示されているように、「年表、地図その他の資料を一層活用させる」ことが重視されている。」とある。また、「指導に当たっては、「情報を主体的に活用する学習活動を重視する」こと及び「地図や年表を読みかつ作成する（第3款の2）ことを重視する必要がある。平素の学習において、示された資料などの内容を受容し受け入れるのではなく、自ら資料を収集・選択する力やそれを批判的に読み取って解釈し考察に生かす力、さらにその成果を年表

や地図など自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けさせることが大切である。このことは、日本史の学習に限らず、社会における各種の情報を的確にとらえてよりよい生活を営む上で必要な資質である。」とある。自ら資料を読み取って解釈し考察する力、その成果を自ら作成した資料の形で適切に表す力を身に付けさせる授業を展開しなければならない。さらに、改訂の要点では、「日本史B」について、「現在を生きる生徒にとって重要なことは、現代の社会の形成過程とその特色についての十分な認識であり、これに直接かかわる近現代の学習が一層重視されなければならない。」とあり、近現代の学習が重視されている。近現代の学習が重視されていることは、他の歴史科目も同様である。

また、次期学習指導要領の改訂に向けた議論においても、現代的な諸課題を歴史的に考察するため、近現代における歴史の転換等を捉えた学習の必要性、歴史の中に「問い」を見だし、資料に基づいて考察し、互いの考えを交流するなど、歴史の学び方を身に付けることの重要性が論点の一つとなっている。

このことから、本調査研究では、日本史A、日本史Bの近現代の学習で、諸資料に基づいた比較、分類、関係付け、理由付けなどを通して歴史的事象を理解させるとともに歴史的思考力を培う実践を行った。三つの事例においては、グループ学習を効果的に取り入れ、生徒同士の対話を通じて、主体的な学び、より深い学びの中で、生徒の歴史的思考力を培う工夫を行った。

事例1では、日本史Aで「日清・日露戦争」を取り上げた。様々な風刺画を用いてワークシートを作成し、日清戦争後の日露の対立、帝国主義列強の対立の構図について複数の資料などを関係付けて考察させる実践を行った。

事例2では、日本史Aで「太平洋戦争」を取り上げた。グループごとにテーマを与え、複数の資料を読み取る活動を通して、なぜ沖縄戦が民間人を巻き込んだ激戦となったのかを考察させた。さらに、グループごとに発表させ、それぞれのグループが発表した内容を関係付けることで、沖縄戦全体を捉えさせる実践を行った。

事例3では、日本史Bで「戦後のGHQによる占領期」を取り上げた。GHQ、当時の日本の指導者、日本国民が戦後の日本をどのような国にしたいと思っていたかを、それぞれの立場で考察させる授業を展開した。単元のまとめとして、これまでの学習をもとに関係付けや理由付けを行い、占領期を自分なりの言葉で表現し、さらにグループ学習を通して他者の考えから自分の考えを深化させることで、占領期を捉えさせる実践を行った。

また、**事例2**では、沖縄戦の際に活躍した本県出身の荒井退造氏について触れている。郷土の歴史やゆかりのある人物を授業で紹介し、それを切り口に授業を展開すれば、歴史をより身近なものと感じることができるだろう。郷土の歴史やゆかりのある人物については、栃木県教育委員会「とちぎふるさと学習」のホームページに掲載されている。ぜひ、活用していただきたい。

栃木県教育委員会「とちぎふるさと学習」のホームページ
<http://www.tochigi-edu.ed.jp/furusato/>

事例 1 日清・日露戦争時の各国の思惑を考察する

～ 風刺画を核として複数の資料を比較し、関係付ける ～

1 ねらい

本事例では、日本史A「日清・日露戦争」の単元において、東アジアをめぐる帝国主義列強の対立、特に日露の対立を、当時の国際関係を示唆する風刺画を用いて考察させる実践を行った。当時の国際情勢や社会状況を一枚の風刺画から読み取らせやすい上、生徒が興味・関心をもって学習することができる考えたからである。複数の風刺画が示すことを推測させ、様々な資料を比較し、関係付けながら、個人又はグループ学習を通して考察させることで、最終的に自らの言葉で学んだことを表現させることを目標とした。

2 授業実践

(1) 単元名 日清・日露戦争

(2) 単元目標

日清・日露戦争前後の国際情勢に着目し、両戦争を通じて国際的地位を高めた我が国の動向や、国際情勢の推移について考察させる。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
日清・日露戦争を通じて国際的地位を高めた我が国の動向や、国際情勢の推移に関心を持ち、意欲的に取り組もうとしている。	日清・日露戦争前後の国際情勢に着目し、両戦争を通じて国際的地位を高めた我が国の動向や、国際情勢の推移について、多面的・多角的に考察した上で公正に判断し、自らの言葉で表現している。	日清・日露戦争前後の国際情勢と我が国の動向について、諸資料から情報を適切に選択して読み取ったり、まとめたりしている。	日清・日露戦争前後の国際情勢、両戦争を通じて国際的地位を高めた我が国の動向などについて理解し、基本的な知識を身に付けている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（6時間）

次	時	学習内容・ねらい等	評価の観点				評価規準
			関	思	技	知	
1	1 2	・日清戦争と三国干渉 風刺画から日清戦争以前の東アジアの国際情勢を読み取り、日清戦争の開戦の経緯と経過について理解する。また、下関条約の内容と三国干渉から、ロシアの東アジアにおける影響力について考える。		○	○		・日清戦争以前の東アジアの国際状況を読み取っている。 ・日清戦争の経過と結果について理解している。 ・ロシアが三国干渉をきっかけに東アジアにおいて影響力を高めた要因について考察している。

2	3 4	・中国分割と日英同盟 風刺画から帝国主義列強による中国分割を読み取り、中国分割後の国際情勢を理解する。また、日英同盟による日露、英露の関係を読み取り、それらを取り巻く各国の思惑について考える。		○	○	・中国分割についての風刺画から、列強の対立を読み取っている。 ・中国分割が国際情勢に与えた影響を考察している。 ・当時の東アジアをめぐる国際情勢を考察している。
3	5 6	・日露戦争 日露戦争の経過及び結果、日露戦争後の日本の朝鮮半島に対する植民地支配の過程を理解する。また、資料から日露戦争がアジアに与えた影響、日露戦争後の国際関係の変化が、第一次世界大戦の対立構図の一部を形成したことを理解する。		○	○	・日露戦争の経過及び結果を理解している。 ・日本の朝鮮における植民地支配の過程を考察している。 ・日本の勝利がアジア諸国に与えた影響を理解している。 ・日清・日露戦争を通じて国際的地位を高めた我が国の動向や、国際環境の推移に関心をもち、意欲的に取り組もうとしている。

3 授業の様子

(1) 第1次

第1次においては、日清戦争における日本の勝利が、その後の東アジアの情勢にどのような影響を与えたのかを考察させた。授業では、ワークシートを用いて、考えたことや学んだことを記入できるように工夫した。

第1時では、日清戦争直前の東アジアの国際情勢を考察させた。その際、ビゴーが描いた風刺画を用いた。まず、風刺画にタイトルをつけて、登場人物A・B・Cの吹き出しに、それぞれ自由にセリフを入れるよう指示した。ほとんどの生徒が「釣り」や「魚」などの抽象的な単語を用いてセリフを入れていた。その後、教科書とワークシートを用いて、日清戦争に至るまでの過程を学習し、再びセリフを入れるよう指示した。今度は、「朝鮮」「日本」「中国」といった国名や、「朝鮮をめぐる争い」といった具体的な語句を用いて表現をするようになった(図1)。

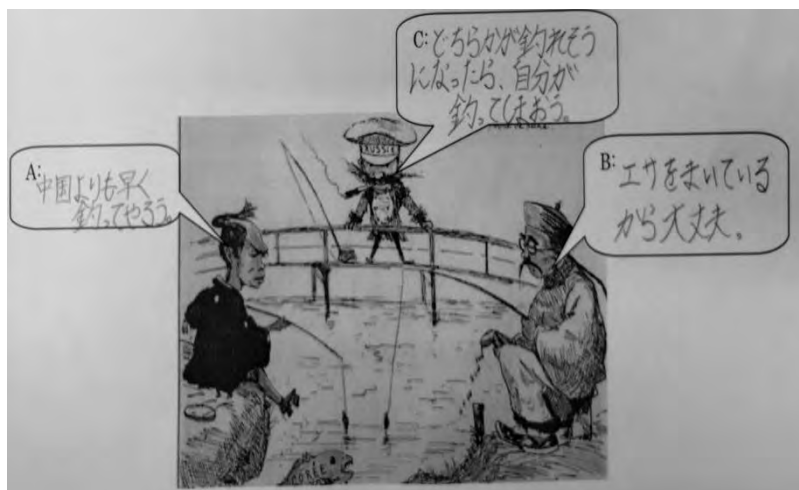


図1 生徒の記入例

第1時のまとめとして、「1875年から1891年の間における朝鮮半島をめぐる国際関係」を簡潔に記述させた。研究実践を行った学校の生徒の多くは、短い文であっても記述に取り組むことが難しかった。しかし、この学習活動においては、意欲的に取り組み、学習し

た内容をまとめることができた。

第2時では、日清戦争の経緯及び結果について学習した。その中で、日露戦争へ向かう東アジアの国際関係の中で、キーファクターとなる日露の対立に着目させるために、第1時と同様に「三国干渉」をテーマとした風刺画を用いて、登場人物のセリフを推測させた。最初は「よこせ」や「わたせ」など、抽象的なセリフを考えた生徒が多かった。その後、日清戦争の経緯と結果、下関条約と三国干渉の内容についての学習を行い、ロシアの東アジアにおける影響力について考察させた。そして、再び同じ風刺画に生徒が書いたセリフには、「遼東半島を返せ」や「せつかく清からもらったものなのに」など学習した内容を有機的に関係付けて表現する生徒が多くなった(図2)。そこで、4、5名のグループを作り、書いた内容を比較させ、セリフの中に出てくるキーワードを確認させた。「遼東半島」「日本」「ロシア」などのキーワードが挙がった。そのキーワードを書いた理由を数名に発表させたところ、生徒が学んだ知識をもとに、風刺画が示す内容を理解し、適切に表現することができていた。



図2 生徒の記入例

(2) 第2次

第2次では、これまでに学習したことを踏まえて、日清戦争及び三国干渉の結果明らかになった朝鮮及び満州をめぐる日露の対立が、中国分割などを経てさらに激しいものになったことを理解することを目標とした。そこで、国際関係の変化が、日露の対立にどのような影響を与え、最終的に日露戦争が勃発するに至ったのかを風刺画などの資料を用いて考察させた。授業では、第1次と同様に風刺画を用いて、考えたことや学んだことを記入できるようにワークシートを工夫した。

第3時では、ワークシート(資料)を配付し、設問1の風刺画にタイトルをつけさせて、描かれた人物は何と言っているのかを推測させた。生徒の中には、イギリスに該当する人物の吹き出しに、「ロシアの思いどおりにさせない。」というような記述はあったものの、全体的には、抽象的なセリフを書いた生徒が多かった。



図3-①



図3-②

その後、設問2の中国分割に関する風刺画2枚(図3-①と図3-②)を比較させ、共通点を挙げさせた。生徒が挙げた共通点は、次のようなものであった。

- ・ 中国が描かれている
- ・ 中国を取り合っている
- ・ 描かれている人物は 6 人
- ・ 清国の領土をそれぞれの国で分けようとしている など

さらに、設問 3、4 で中国分割を表す 2 枚の風刺画の共通点を共有し、何を示しているのかを生徒に考えさせた。「おそらくヨーロッパの国々が中国を分割している」と答えた生徒が多かった。そこで、図 3-②に登場する人物はどの国を表しているかを話し合わせると、「中央の手を挙げている人物は中国だね」「右から三番目のひげを生やした人物がロシアで、その人物に手を添えているのはおそらくフランスだね」「一番右側は日本でしょ」と生徒たちがこの絵に登場する人物の国名を記入した（図 4）。



図 4 生徒の記入例

その後、中国分割の内容を学習した。その中で生徒に特に注目させたのが、ロシアが万里の長城より北を勢力範囲とし、旅順や大連を清から租借したことである。日露戦争が起こった要因の一つとして考えられる満州及び朝鮮をめぐる日露の対立、特に朝鮮半島に対するロシアの圧力が高まったことを、生徒に意識させたかったからである。そのため、同時期に清からロシアに対して、東清鉄道の敷設権が与えられたことも説明した。確認として、ワークシートの設問 5 を行い、全ての生徒が、旅順港に堂々と横たわる熊を「ロシア」と記入することができた。また、満州及び朝鮮半島をめぐる対立が日露戦争の直接的原因であることを意識させるために、ワークシートの設問 6 をグループで取り組ませた。ほとんどの生徒が、朝鮮や中国をめぐる、日露の対立について記入していた。なかなかワークシートに記述することができなかった生徒も、グループ内の生徒による適切な声掛けにより、記述することができた。机間指導をしていると、生徒から「右端の物体は何を表しているのですか」「なぜ朝鮮の女性は着物を着ているのですか」などの質問が出された。生徒が資料の細かい点まで注意を払い、様々な情報を読み取ろうとしている様子をうかがうことができた。

第 4 時では、設問 7 などから英露の対立、日英同盟の結成、東アジア情勢を学習した後、設問 8 で、第 3 時の初めに用いた風刺画に再びセリフを記述させた。これまでに学習した内容を関係付けて、具体的な記述をする生徒が増えた（図 5）。

まとめとして、これまで学習したことをもとに、設問 9 の「日清戦争後から日露戦争に至る経緯を、日本・ロシア・イギリスの関係に着目しながら具体的に説明しよう」という活動に取り組んだ。図 6 と図 7 は、生徒の記入例と、話し合いの様子である。話し合いの後、グループごと



図 5 生徒の記述の変化

に意見を発表させ、共有した。

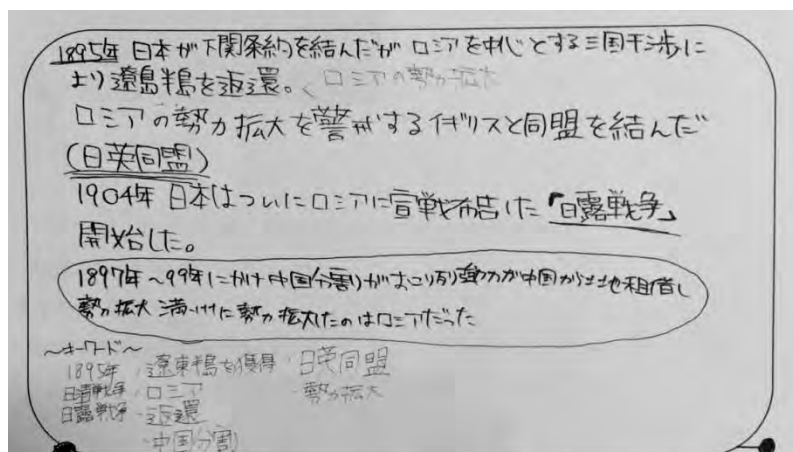


図6 生徒の記入例



図7 グループ学習の様子

(3) 第3次

第3次では、日露戦争の経過及び結果、日露戦争後の日本の朝鮮半島に対する植民地支配の過程を理解させた。日露戦争に関する風刺画や日露戦争後に書かれたネルーの著書を資料として、日露戦争がアジアに与えた影響を理解させ、日露戦争後の国際関係の変化が、第一次世界大戦の対立構図の一部を形成したことを考察させた。第3次においても、グループで話し合いをする活動や、資料から読み取ったことを自分の言葉で表現する活動を取り入れた。グループ学習では、日露戦争勃発の背景を表した風刺画を用いて考察させた。その後、日露戦争の経過と結果を年表や地図を用いて理解させた。日露戦争がアジアに与えた影響についての資料を読み取らせたところ、全ての生徒が読み取った内容を、自分の言葉で表現することができていた。

4 成果と課題

(1) 成果

様々な資料をもとに、比較し、関係付けを行いながら、歴史を考察する授業を展開することは、生徒の歴史に対する理解を深め、歴史的思考力を高める上で有効であった。国際情勢や社会状況を読み取らせやすい風刺画を多く使ったことも効果的であったと考える。また、グループ学習を通して、他者の意見を聞くことにより、個人で考えたことを他者の意見と比較したり、関係付けたりして、さらに深めることができていた。

定期考査において「日清戦争後から日露戦争勃発に至る経緯を、日本・ロシア・イギリスの関係に着目して、簡潔に述べよ」という問題を出題した。歴史的思考力を問う論述問題においても、ほとんどの生徒が筋道を立てて述べることができていた（図8）。日々の授業において、生徒自身が考えたことを説明する活動、他の生徒の意見を聞く活動、そして最終的に自分自身がどのように考えたのかを表現する活動を取り入れることが重要であると感じた。また、日露戦争後の国際関係の変化を学習した際に、生徒から「この後、世界の歴史がどう動くのか、すごく気になります。」という発言があった。実践を通じて、歴史に対する関心・意欲も喚起させることができた。

世界史A、世界史Bでの学習においても、19世紀末から20世紀初頭の国際関係を学習する際に、今回の実践で使用した風刺画やこの時代に描かれた風刺画を用いて、ヨーロッパ帝国主義国間の対立を理解させる授業も実践できると思われる。

単元終了後に行ったアンケートでは、様々な資料を用いて歴史学習を行う授業については、全ての生徒がわかりやすい授業であると答えた。「今回実践したような授業を続けていくことで思考力・判断力・表現力は身に付くと思うか」という質問に対しても全ての生徒が、そう思うと答えた。

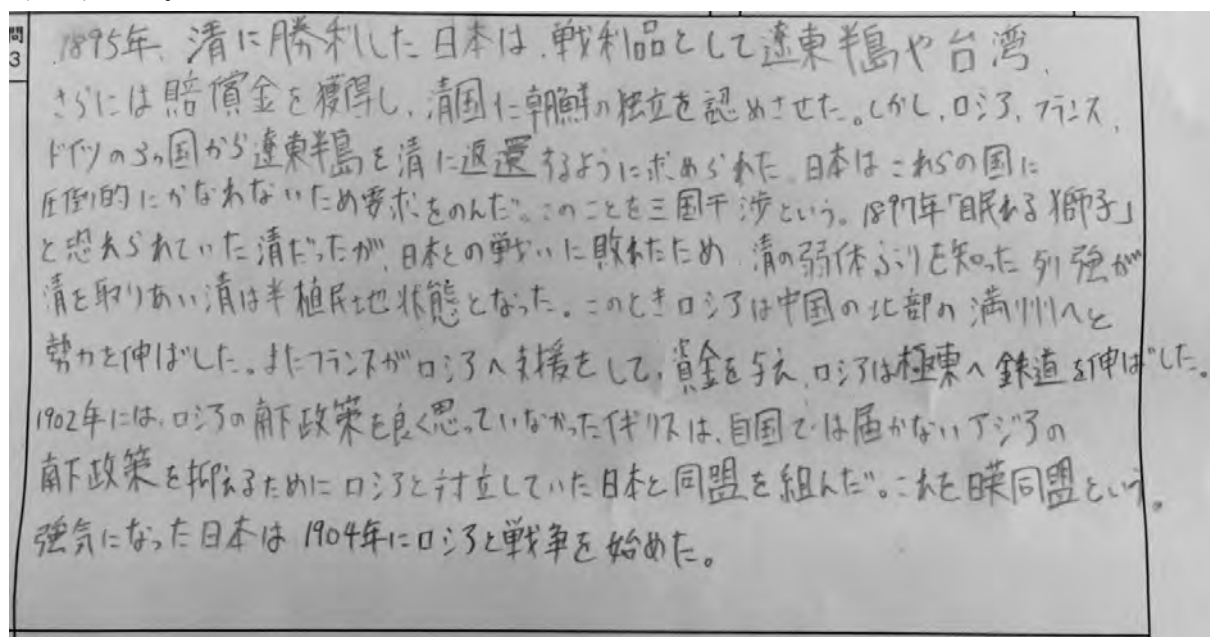


図8 生徒の解答の一例

(2) 課題

生徒に提示する資料の精選を行わなければならない。風刺画だけでなく、映像資料、当時の新聞、グラフ・数値などを提示することも考えられる。風刺画とグラフなどを関係付けることで、より効果的に歴史的思考力を高める工夫ができるものと思われる。また、単元の目標、授業の目標に到達するために、グループで討論をさせたり、歴史新聞などを作成させたり、パソコンを用いてプレゼンテーションをさせたりする方法も考えられる。

〔参考文献等〕

- ・石和静著『風刺画にみる日露戦争』（彩流社）
- ・文部科学省検定教科書『高等学校 日本史A 人・くらし・未来』（第一学習社 平成24年）
- ・『小説世界史図録』（山川出版社）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 地理歴史科】』（平成24年）

日本史 A ワークシート③

年 組 番 名前

1. 次の風刺画にタイトルをつけて、せりふを入れてみよう。

タイトル「

」

A:

B:

C:



2. 次の2枚の風刺画 A・B の共通点を考えよう。

【風刺画 A】



【風刺画 B】



【共通点】

3. 風刺画 A にタイトルをつけよう。

タイトル「

」

4. 風刺画 A の吹き出しにセリフを入れよう。

d



a

b

c

5. 次の絵は、1897年に描かれたものである。この絵にある「PORT ARTHUR」とは旅順港をさしている。ここに出ている艦は、どこの国を表しているだろう。

【



6. 次の風刺画は当時の東アジアの国際情勢をあらわしている。この絵があらわしていることを、あなたの言葉で自由に説明してみよう。



7. 次の日露戦争前の東アジアをめぐる国際情勢を示した年表を完成させよう。

1895年：() 条約 → 日本が () 半島を獲得
 1895年：() → () を中心とする列強が日本に対し
 () 半島の返還を要求
 1897～99年：() → 列強が中国から土地を租借し、勢力を拡大
 満州に勢力を拡大したのは()
 1902年：() の成立 → () と対立を深めていたイギリスと
 日本が同盟を結ぶ

8. 次の風刺画にタイトルをつけて、せりふを入れてみよう。

タイトル「」



9. 日清戦争後から日露戦争にいたる経緯を具体的に説明しよう。その際、「日本」「ロシア」「イギリス」の3つの国の関係に着目しよう。

事例 2 なぜ沖縄戦は民間人を巻き込んだ激戦になったのか ～ 複数の資料を分類、関係付けて考察する ～

1 ねらい

本事例は、日本史Aの「第二次世界大戦と太平洋戦争」の単元においての、授業実践である。特に沖縄戦に関して、「沖縄戦がなぜ民間人を巻き込んだ激戦になったのか」を学習課題に設定し、グループ学習を行った。グループごとに、異なる資料を比較、分類、関係付け、理由付けを行って読み取らせ、まとめの活動を行わせた。さらに、グループごとの発表を関係付けることで、沖縄戦について深く考察させた。

沖縄戦は、太平洋戦争終局において日米双方にとって重大な転機と考えられる戦闘の一つである。本事例では、地図、ビラ（伝単）、文書、グラフ、写真など様々な資料を活用して、思考力・判断力・表現力を高めることに重点をおき、資料の読み取りから論理的に課題を解決する力を身に付けることをねらいとした。そこで、グループ学習を通して、「資料からの情報の読み取り」「付箋紙を使用した相互の意見交換」「資料から読み取れた情報をまとめる作業」「発表」「複数の発表を関係付けた沖縄戦の考察」を行った。

2 授業実践

(1) 単元名 第二次世界大戦と太平洋戦争

(2) 単元の目標

太平洋戦争が勃発した経緯や時代背景、日米関係の推移、その後の日本に与えた影響などを理解させる。沖縄戦が、日米双方、特に日本にとっては多数の民間人にも甚大な被害をもたらした激戦になった原因について、沖縄の地理的特徴や戦略上の位置付け、民間人を戦争に巻き込んだ当時の社会情勢などを資料から読み取る活動を通して、多面的・多角的に考察させる。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
太平洋戦争中の社会情勢と、沖縄が激戦地となった理由と影響について、関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。	太平洋戦争に関する複数の資料から因果関係やつながり、影響について多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の情勢を踏まえ、表現している。	太平洋戦争に関する資料から情報を的確に読み取り、それを比較したり関係付けたりすることができている。	太平洋戦争が勃発した経緯や時代背景、日米関係の推移、その後の日本に与えた影響などを理解し、その知識を身に付けている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（4時間）

次	時	学習内容・ねらい等	評価の観点				評価規準
			関	思	技	知	

1	1	・日中戦争の勃発と国際関係 日本が長い戦争状態に入った経緯と、ヴェルサイユ体制の崩壊という国際的な時代背景について理解する。 ・アジア太平洋戦争の勃発 太平洋戦争が開戦することになった背景について、日本とアメリカの関係を軸に考察する。				○	・国際的な視野に立ち、日本が置かれていた位置について理解している。 ・太平洋戦争が開戦するまでの日米交渉の過程から、開戦に至った背景を考察している。
2	2	・戦争末期の国民生活 南方戦線の崩壊とともに国民生活が窮乏する過程を理解する。また、本土決戦の準備のために総動員体制が敷かれたことを資料から考察する。				○	・南方戦線が崩壊していった過程を理解している。 ・国民生活の窮乏と、総動員体制の実態について、資料から読み取ったことをもとに、適切に表現している。
3	3 (本時)	・沖縄戦 沖縄戦が太平洋戦争におけるそれまでの戦闘と比較して、日米ともに膨大な戦力が投入され、民間人も含む多大な犠牲が出た激戦となったことを読み取る。また、グループで資料から情報を読み取る活動を通して、沖縄戦が激戦となった背景を考察する。				○	・太平洋戦争における各戦線の日米戦力・死者数を比較し、沖縄戦の特徴を適切に捉えている。 ・沖縄の地理的特徴や戦略上の位置付け、沖縄戦がその後の戦況に及ぼした影響について、適切に考察し、表現している。
	4	・太平洋戦争の集結 激戦になった沖縄で、県民保護のために尽力した荒井退造について、その事績を学習する。また、日本がポツダム宣言を受諾して終戦に至るまでの過程について理解する。	○			○	・太平洋戦争中の社会情勢と、沖縄が激戦地となった理由と影響について、関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。 ・終戦に至るまでの経緯を理解している。

(5) 本時の目標

- ・太平洋戦争における沖縄戦に関係する諸資料を比較したり関係付けたりして、情報を適切に読み取り、表現させる。
- ・太平洋戦争における沖縄戦が、民間人を多く巻き込んだ激戦となった原因について、読み取った情報から考察させる。

(6) 本時の指導（第3時）

	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価
導入	本時の学習内容	・本時の学習内容について説明を聞く。		
展開①	沖縄戦の特徴	・太平洋戦争の経過と戦闘ごとの日米の戦力・	・グループごとにスライドの画面と同じ画像を	・太平洋戦争における各戦線の日米戦力・戦没

		戦没者数を地図に投影したスライドから、沖縄戦の特徴を読み取る。	配付し、特徴を挙げさせる。	者数を比較し、沖縄戦の特徴を適切に捉えている。 【資料活用の技能】
展開②	沖縄戦はなぜ民間人を巻き込んだ激戦になったのか (グループごとの活動)	・グループごとにヒントとなる資料を用いて、設問に対する答えを考察する。	・意見が出しやすいように、付箋紙に書いて貼り出す方法で行わせる。 ・机間指導を行い、活動が滞っているグループには、意見交換が円滑に進むよう支援する。	・沖縄の地理的特徴やその位置付け、沖縄戦がその後の戦況に及ぼした影響について、考察・表現している。 【思考・判断・表現】
展開③	発表	・グループごとに代表者がまとめた結論を発表する。 ・沖縄戦が日米双方の思惑や当時の時代背景の中で激戦となったことをつながりとして理解する。	・同じ資料や設問でも異なる考察が導き出される場合もあることを指摘する。	
まとめ	戦後の沖縄	・戦後の沖縄に米軍基地が残っていることを理解する。	・次時以降の、占領下の日本に関係していることを説明する。	

3 授業の様子

(1) 第1次、第2次

第1次では、太平洋戦争が勃発するまでの経緯と時代背景、日米関係の推移などを、満州事変や日中戦争の影響から考察させる授業を展開した。第2次では、ミッドウェー海戦以降、日本の勢力範囲が徐々に縮小していく過程について、地図を用いて学習した上で、国民生活が窮乏していく様子、総動員体制が敷かれていく様子を、写真やポスターなどから読み取る活動を行った。

研究実践を行った学校の生徒は、授業中は関心のある話題に対しては興味をもって耳を傾けることができるが、関心が薄い内容に対しては反応が良くないこともある。一方、活発な生徒も多く、教師の発問に対しては積極的に発言する雰囲気できており、自分の意見を他の生徒に表現したり伝えたりしやすい環境を作ることによって、活発に話し合う様子が見られた。

(2) 第3次

第3時（本時）を展開するに当たり、「沖縄戦はなぜ民間人を巻き込んだ激戦となったのか」という設問を軸に、様々な角度から背景・原因を考察するための小設問と資料を生徒に提示した。クラスを10グループに分割し、2グループごとに1種類の小設問と資料を与える形で実施した。

グループごとの小設問・使用資料は次のとおりである。

グループA 【設問】なぜアメリカは膨大な兵力を投入して沖縄を手に入れようとしたのか。

資料①—米軍の侵攻ルートと米軍基地の分布の地図

資料②—アイスバーグ作戦の概要の和訳（本土攻略のための軍事基地の建設）

グループB 【設問】 日本の軍部は沖縄をどのような場所だと考えていたのか。

資料①—アメリカ軍がまいたビラ（ルソン島陥落後）

資料②—帝国陸海軍作戦大綱（沖縄などを本土防衛の前縁とするとしたもの）

グループC 【設問】 日本側は沖縄防衛のためにどのような方法をとったのか。

資料①—アメリカ軍が沖縄住民にまいたビラ

（「女老人だけでは沖縄の再建は望みない」と書かれているもの）

資料②—捕虜の写真（老人・少年）・沖縄戦直後の人口ピラミッド

グループD 【設問】 沖縄県民に多大な犠牲が出たのはなぜか。

資料①—日本軍が沖縄の住民にまいたビラ（米軍の非道さを訴える内容）

資料②—戦陣訓（生きて虜囚の辱を受けず）

グループE 【設問】 沖縄が陥落したことで日本本土にはその後どのような影響があったか。

資料①—沖縄戦後に本土で米軍がまいたビラ

（本土攻撃まで間もないことを示す「時計」が描かれたもの）

資料②—日本に飛来したアメリカの航空機数のグラフ

各グループには大きめの付箋紙を配付し、まず、資料①・②それぞれから読み取れることを付箋紙に書き、模造紙に貼るよう指示した**資料A**。その活動が終了した後、ワークシートの「資料①からグループメンバーが考えたことのまとめ」「資料②からグループメンバーが考えたことのまとめ」の欄に取りまとめた意見を書き出し、それをもとに、与えられた設問に対するグループごとの最終的な結論を考え、「上の二つから導き出した、この問いに対する班の考え」の欄にまとめる活動を行うように指示した**資料B**。

生徒に資料を提示するにあたり工夫した点は、次の2点である。まず1点目として、資料をグループで共有しやすいようにカラー印刷でラミネート加工したものを配付したことである。カラー資料は白黒印刷よりも読み取りやすく、スライドなどよりも小グループで情報を共有しやすいと考えたからである。また、ラミネート加工をすることで他のプリント類とも区別しやすくなり、この資料を使って考察することを意識付けるのに効果的であった。

2点目は、資料から有用な情報を選択して、読み取ることができるよう、「考えるヒント」を提示したことである。例えば、グループCの資料②（図1）「人口ピラミッドと捕虜の写真」には、「考えるヒント」として「左の人口ピラミッドと、下の写真に写っている日本人捕虜の年齢層から、どんなことが考えられるだろうか？ 性別・年齢に特に注目して考えてみよう」と記載し、グループごとの設問が考察しやすくなるようにポイントを示した。（それぞれのグループに配付した資料①・②は、栃木県総合教育センターホームページ「教材研究のひろば」掲載の資料）

生徒にはあらかじめ、「資料の読み取り・まとめにそれぞれ5分程度を使う感覚で時間配分すること」と言い添え、グループでの考察15分、発表15分、最後のまとめ10分というタイムスケジュールを提示し、活動に取り組ませた。考察の手順の説明を受けた生徒たちは、どのグループも資料をじっくり読み取り、ヒントをもとに考えたことを付箋紙に書き、貼り出していた（図2）。



図1 グループCの資料②

その間、机間指導をしながら、考え込んで手が止まっているグループには、ビラや写真の意味することやグラフの見方を助言した。また、意見が出揃ったグループにはまとめの用紙に書き込むよう指示を出すなどして支援した。ビラや写真などから情報を読み取るグループA・Cなどに比べ、文

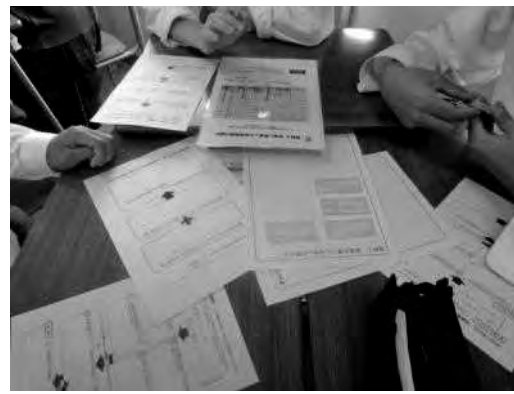


図2 生徒の取組の様子

書やグラフからの読み取りを割り当てられたグループB・Dなどの方が、やや困難を感じている様子だったため、グループB・Dには特に時間をかけて説明・助言を行った。Eのグループには、沖縄が陥落した後の日本本土への影響を考察させた。日本に来襲したアメリカの航空機数の統計から情報を読み取っていた。

授業の様子から、資料の読み取りはある程度できたグループが多かったものの、最終段階として設問に対する考えをまとめ上げることが難しかったようである。実際に、まとめの部分だけが書き終わらないグループもいくつか見られた。これらのグループには、資料①・②から読み取れたことを発表させるようにした。

発表内容は、同じ資料につき2グループの意見を出す形になるため、同じような内容の結論が導き出される場合もあれば、異なる結論や、相互に補完するような内容が導き出される場合もあり、生徒たちは他グループの発表を熱心に聞いて、発表内容をワークシートに書き込んでいた。

【同じ結論が出た例】

- 〔D-1班……「捕虜になるくらいなら死ね」という考えがあり、さらに犠牲者を増やすことになる。
- 〔D-2班……日本軍は沖縄の人に「捕虜になるくらいなら死ね」と言ったので、民間人の犠牲者が多かった。

【異なる結論・補完し合う結論が出た例】

- 〔A-1班……いつでも本土を攻められるようにするため。
- 〔A-2班……攻撃しやすい。軍事基地を確立させたい。海路や航路の安全を確保したい。
- 〔E-1班……沖縄の抵抗が終了すると各地への空襲が増えた。資料①のビラがまかれたことにより、日本軍の士気が低下し、不安や焦りが募った。
- 〔E-2班……沖縄戦の後、基地が本土のすぐ近くにできたから、本土への空襲など、アメリカの攻撃の回数が増えた。

グループAからDへの設問に対する考えが出そろった後、「結果としてなぜ沖縄戦が民間人を巻き込んだ激戦となったか」を考察させた。そして、Eのグループの発表後に、スライドで日本に来襲したアメリカの航空機数の統計グラフを提示し、沖縄陥落後に空襲が増えたことを示した。また、宇都宮や真岡への空襲が行われていたことにも着目させ、太平洋戦争に関する出来事が、身近な地域で起きていたことも補足した。

発表した内容は、まとめのワークシートに記入させた**資料C**。このワークシートは、それぞれの設問に対して各グループが出した結論を関係付け、全体の流れや因果関係が概観できるようにした。生徒は、他のグループの発表内容も関係付けて、ワークシートに記入していた。

第4時では、これまで学習したことを踏まえて、沖縄で県民保護のために尽力した本県出身の荒井退造氏について、その事績を紹介した。荒井氏は沖縄警察部長として沖縄戦の二年前に赴任し、兵庫県出身の島田叡知事とともに、沖縄県民の県内・県外疎開を積極的に呼びかけ、

約二十万人を救ったとされている人物である。日本軍と沖縄県民の関係ばかりが視点の中心となりがちな沖縄戦の学習において、行政という立場から行動した荒井氏の事績は、新たな視点を提供することにもなったと考えられる。

その後、広島・長崎への原爆投下、ソ連の参戦、日本がポツダム宣言を受諾して終戦に至るまでの過程について整理した。そして、単元のまとめとして、太平洋戦争が日米だけでなくアジア太平洋地域に与えた影響を考察させた。

この単元終了後に、研究実践を行った学校では、修学旅行で沖縄を訪問した。修学旅行の事後指導の中で、戦後の沖縄が現在まで抱える諸問題についての考察も行った。米軍基地近辺を訪問したグループも多かったため、戦後アメリカの施政下に置かれた沖縄が抱える「基地問題」について、生徒たちから多面的な意見が出てきた。沖縄戦について、事前にしっかりと学習した上で現地を訪問したことで、生徒の中での情報や知識がいろいろな形で結び付いたと考えていいだろう。また、本県出身の荒井退造氏の事績についても詳しく紹介したため、平和祈念公園を訪問した際には荒井氏が祀られた慰霊塔に参拝し、平和を願って放蝶したり、花や宇都宮の水を供えたりするなど、生徒たちは平和学習の一環として得難い経験をする事ができた。

4 成果と課題

(1) 成果

この単元の中で、様々な資料から日米の国力の比較、ひめゆり学徒隊の悲劇、郷土の出身者である荒井退造氏の事績などを交えて太平洋戦争を学習したことで、太平洋戦争について深く考察することができた。付箋紙を使ったグループ学習は、生徒にとってあまり体験したことがない活動だったようだ。「意見を出しやすく、また、一人で考えるよりも友人と意見を出し合うことでいろいろな見方があったことがわかった」との感想があった。自分の意見を他の生徒に見せたり、他の生徒の意見を聞いたりすることで考えを発展させることができ、さらに思考を深めることができたのではないかと考える。

また、事後アンケートの結果（図3）を見ると、授業を通しての関心・意欲の喚起や知識・理解の深化に、効果があったと考えられる。「太平洋戦争について理解できたか」「沖縄戦で民間人が多く犠牲になった理由が理解できたか」の両項目について、「そう思う」と答えた生徒が全体の9割を超えていた。これは、生徒たちが授業に真摯に取り組み、自分たちで考え、提示された材料を用いて、グループで協力して理論を構築したことによる結果と考えられる。

質 問 内 容	とても そう思う	どちらかとい えばそう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
太平洋戦争について理解できたか	46.7%	50.8%	1.7%	0.8%
沖縄戦で民間人の犠牲者が多かった理由を理解できたか	58.5%	39.0%	1.7%	0.8%

〔グループ活動の感想（自由記入欄に生徒が書いたものの一部）〕

- ・一人でやるよりは仲間がいるのでアイデアが出やすい。
- ・4人の意見を一つの意見にまとめるのが楽しかった。（大変だった。）
- ・周りの意見を聞いていろいろな視野から捉えることができた。
- ・友人と意見を交えることにより、普段と違う意見が出てとても有意義だった。 など

〔沖縄戦を学習しての感想〕

- ・戦争は二度と繰り返してはならないと感じました。
- ・沖縄で起こったことは忘れてはいけないと思った。

・以前は「戦争は大変だね」と思うだけだったが、学習後は言葉が見つからない。複雑です。 ・沖縄戦では、戦争のせいで軍人だけではなく民間人も死んでしまったので、戦争はやっぱりよくないものと思った。		など
〔印象に残った資料とその理由〕		
(空襲後の那覇市の写真)	・ 現在とまったく景色が変わっているから。	
(米軍上陸の写真)	・ せまる艦隊が衝撃的だったから。	
	・ アメリカの戦力が多すぎたから。	
(艦砲射撃の写真)	・ もしも実際に見たらとても怖いと思ったから。	
(平和の礎の写真)	・ 荒井退造さんの名前を見つけないと思ったから。	
(アイスバーグ作戦)	・ 古いアメリカの資料が見られて貴重だったから。	
	・ 沖縄を完全に攻略するための作戦書が正確だったから。	など

図3 事後アンケートの結果（抜粋）

(2) 課題

第二次世界大戦の授業を考える際に、日本の敗戦を決定づける他の戦線について考察させる授業、ドイツやイタリアと比較させる授業なども考えられる。また、荒井退造氏のような郷土に関連する人物や出来事から授業を展開することも可能だと考えられる。栃木県では宇都宮市や鹿沼市、足利市、真岡市など多くの地域が空襲を受けており、各地に残る資料から太平洋戦争を考察させる実践もできるのではないだろうか。

授業を実施する方法についても、付箋紙を使用したグループ学習の他に、地図を利用して太平洋戦争の経過や日本の防衛圏が狭まっていく過程を追ってみる方法、ヨーロッパ戦線と太平洋戦争の経過を時系列に沿って比較・分析していく方法など、いろいろな手法が考えられる。

〔参考文献等〕

- ・ 文部科学省検定教科書『高等学校日本史A 人・くらし・未来』（第一学習社 平成24年）
- ・ 文部科学省検定教科書『高校日本史A』（実教出版 平成24年）
- ・ 国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 地理歴史科】』（平成24年）
- ・ 土屋礼子著『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』（吉川弘文館 平成23年）
- ・ 学習研究社発行『歴史群像 太平洋戦争シリーズ49 沖縄決戦』（学習研究社 平成17年）
- ・ 毎日新聞「数字は証言する ～データで見る太平洋戦争」
<http://mainichi.jp/feature/afterwar70/pacificwar/data1.html>
- ・ 沖縄県立公文書館「公文書等の記録資料に見る沖縄戦 アイスバーグ作戦 沖縄進攻作戦はこのようにして計画・実行・記録された（平成17年度沖縄県立公文書館特別企画展）」
<http://www.archives.pref.okinawa.jp/exhibition/04/cat1/>
- ・ NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」
<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20150614>
- ・ 読谷村「読谷バーチャル平和資料館」
<http://heiwa.yomitan.jp/>
- ・ 個人サイト「これなあに？」
http://www.geocities.jp/kyo_oomiya/

資料B

班のメンバー

班に与えられた資料の番号 A B C D E

日本丸 事以同心
海に 風を吹かせ
を 船に 託す

アメリカは悪黨だから一人を殺して
くわと果てた兵士と同様のあつたに
したがう

アメリカのやうな国は
争ひでその行為を止める上に
国民に七割ばかりでその意欲を
付けた

資料①からグループメンバーが考えたことのまとめ
或年についで使務にするために、事實上 国民は多量に
報知と一人で行く報知はとては

資料②からグループメンバーが考えたことのまとめ
 果民は他にどうもよく出来ず、次ける。そしてついに、
 イの故郷に向かう旅にいくしかおいて思っている。

今令 $p_1 = 1, t = 4.5$

戦つて死人下といから
国のために果しを股すかぬ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

此と師匠の交り
散りて自落しにちかひい

上の2つから導き出した、

この問いに対する班の考え

国は衆民の戦争に於て戦争を以ていふ
 以上は衆民は抵抗せず、之を出来ず、また命を捨て、
 死のため民間人の犠牲者が99%はた

書き終わったらリーターさんは先生のところに持ってきてください。

資料② 意見を書いたふせんを貼ろう

ワークシート

沖縄戦 ～なぜ沖縄戦は民間人を巻き込んだ激戦になったのか～

読み取ってみよう

太平洋戦争中、日本が勢力範囲を縮小していく過程で起きたいくつかの戦闘と比較して、沖縄戦が違うところは？

- ・民間人の死者数がとても多い
- ・米軍の投入した戦力が膨大だったこと。

考えてみよう

A なぜアメリカはそれほどの兵力を投入して沖縄を落とそうとしたのか？

- ・基地を作るため
(日本を攻略するため)
- ・いつでも日本本土を攻められるように

B 日本の軍部は沖縄をどのような場所と考えていたのか？

- ・沖縄をとられて基地を作られる本土は危ない！
- ・敵の進攻を食い止めるのにとても重要な場所

C 日本側は沖縄防衛のために、どのような方法を取ったのか？

- ・男性がほとんど動員されてしまった
- ・男性が老人も子どもも動員されて再建が遅れそう

D 県民に多大な犠牲が出たのはなぜ？

- ・抵抗することも逃げることもできず県民が命を揺るような状況だった。
- ・かなわないうアメリカ軍に最後まで戦う状況に追い込まれた。

このようなことが背景となって沖縄戦は「民間人を巻き込んだ激戦」となった
では……

E 沖縄が陥落したことで、日本本土にはその後どのような影響があったか？

- ・日本は焦りを感じる
- ・空襲が増えた(沖縄で燃料補給できるようになったから。)
- ・基地が作られてはったので本土に襲来するアメリカの航空機が増加

まとめ

～今、沖縄が抱えている問題～

沖縄に米軍基地が集中している→事故・事件、騒音……

事例 3 第二次世界大戦後の占領期を考察する ～ GHQ、日本の指導者、日本国民の立場から ～

1 ねらい

本事例では、日本史Bの「戦後のGHQによる占領期」の単元において、様々な立場から歴史的
 事象を考察する授業を実践した。この単元では、占領と改革を主体したGHQ、GHQから指令を
 受け改革を行っていった日本の政治家や指導者層、貧困や混乱にある日本国民といった様々な立場
 の人たちが登場する。そこで、占領期を様々な立場から考えられるような発問を行いながら、この
 時代について考察させた。そして、単元のまとめとして、学習した内容を関係付けて、様々な立場
 の人々が、それぞれ、どのような戦後日本の国家形成を望んでいたのかを、個人及びグループ学習
 を通して考察させることで、歴史的思考力を高めたいと考えた。

2 授業実践

(1) 単元名 戦後のGHQによる占領期

(2) 単元の目標

GHQ、日本の指導者、日本国民の立場から、占領政策と諸改革、新憲法の成立、終戦直後
 の日本国民の生活など占領期の社会の状況や変革について考察させる。また、資料等を活用し
 て思考・判断しながら、占領期をについて自分なりの考え、意見をもち、表現させる。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
占領期の社会の状況 や変革に対する関心 と課題意識を高め、意 欲的に追究しようと している。	占領政策と諸改革、国 民の生活などから課題 を見だし、様々な立 場から多面的・多角的 に考察している。	占領期の社会の状況や 変革に対する表やグラ フ、新聞、写真などの 諸資料を活用すること を通して、考察した過 程や結果をまとめている。	占領政策と諸改革、新 憲法の成立、終戦直後 の国民の生活など、占 領期の社会の状況や変 革に対する基本的な事 柄を理解し、その知識 を身に付けている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（7時間）

次	時	学習内容・ねらい等	評価の観点				評価規準
			関	思	技	知	
1	1	・初期の占領政策 アメリカによる日本占領の構造や 特徴を捉える。また、東久邇宮内閣が 人権指令を受け入れられず辞職し、幣 原内閣が成立した過程やGHQによ る指令・実行を理解する。				○ ○	・戦後の日本の改革には、アメリカが強い影 響力をもっていたことを理解している。 ・GHQによる早急な民主化改革に対し、指 導者層の一部は対応できていない様相や GHQが改革を行いやすいような政治家 を首相にした経緯を理解している。

	2	・民主化政策 財閥や寄生地主制が解体された背景とその過程について、資料をもとに理解する。また、労働者保護の法律が作られたねらいや教育の自由主義的改革の内容を理解する。			○	・資料やグラフから戦前の財閥が経済競争を促進する阻害になっていることや財閥解体の過程を、戦前と戦後の農地や農家の違いや農地改革が行われた理由を読み取っている。 ○ ・労働者保護の法律が作られたねらいや教育の自由主義的改革の内容や戦前との違いを理解している。
	3	・政党政治の復活 政党の復活や公職追放、衆議院議員選挙法改正が民主化の進展を推し進めたことを理解する。			○	・戦中の翼賛政治、復活した政党政治、公職追放、衆議院議員法改正を比較して、民主化の進展を理解している。 ○ ・公職追放や衆議院法改正の内容からGHQが目指した戦後政治のあり方を考察し、自分の考えを表現している。
	4	・日本国憲法の制定 日本国憲法の成立過程や内容を理解するとともに、日本の指導者やGHQはどのような戦後国家形成を目指そうとしたのかを考察する。			○	・松本烝治案にみる憲法草案とマッカーサー草案を比較し、政府とGHQの間には戦後の日本国の目指すあり方に方向性の違いがあったことを読み取っている。 ○ ・旧憲法と新憲法を比較し、違いや民主主義の進展の様子を理解している。
	5	・生活の混乱と大衆運動の高揚 写真等の資料を通じて終戦当時の民衆の混乱や暮らしぶりを把握する。また、メーデーやゼネストなどの大衆運動の目的を考察する。			○	・民衆の生活が混乱・困窮していることを資料から読み取っている。 ○ ・民衆生活の混乱・困窮を解決する目的でメーデーやゼネストなどの大衆運動が行われたことを考察している。
	6	・占領期の国家形成への願い① GHQの指令・政策や政府の対応、民衆の暮らしぶりからそれぞれの立場の人たちがどのような戦後日本の国家形成を望んでいたかを考える。			○	・GHQ、日本政府の指導者、日本国民がそれぞれどのような国家を望んでいたのかについて、歴史的事象を根拠に考察している。
2	7	・占領期の国家形成への願い② 前時で考えた個人の意見をグループで出し合い、話し合う。また、話し合った意見をもとに、占領期の時代観をGHQ、日本の指導者、日本国民の視点を踏まえて考える。	○		○	・GHQ、日本政府の指導者、日本国民がそれぞれどのような国家を望んでいたのかについて、歴史的事象を根拠に様々な立場から考察している。 ・占領期の社会の状況や変革に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究しようとしている。

3 授業の様子

(1) 第1次

第1次では、占領期の諸改革や国民の暮らしについて学習した。ここでは、占領期を様々な立場から考えられるように、次のaからeの観点に立った、発問を行い、授業を展開した(図1)。また、ワークシートは、語句を記入する欄だけでなく、発問に対する自分の考えを記入する欄も設けた。

- a : GHQからみた占領期や改革
- b : 日本の政治家や指導者層からみた占領期や改革
- c : 国民からみた占領期や改革
- d : 改革などの因果関係
- e : 改革前と改革後の対比

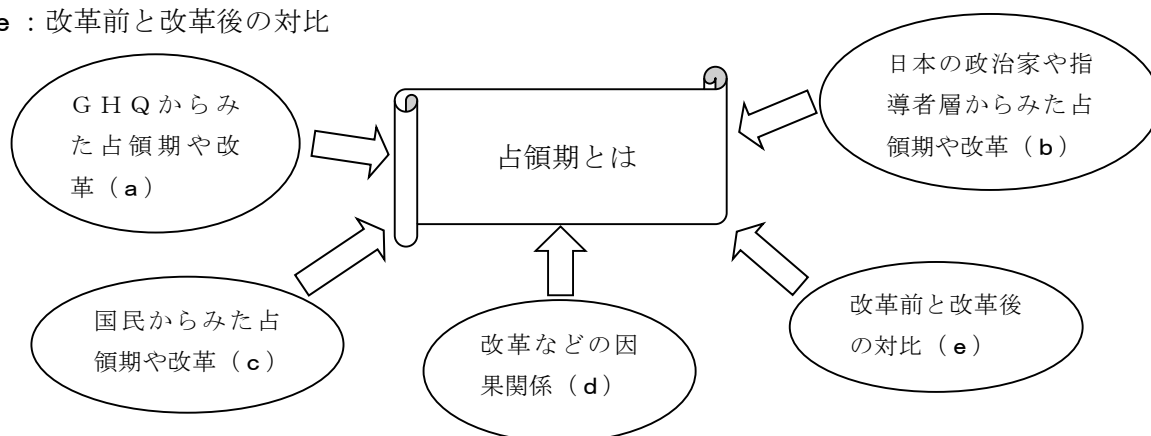


図1

第1時の初期の占領政策の授業では、「GHQは東久邇宮稔彦内閣の後、どのような人に次の内閣総理大臣になってほしいと考えていたと思うか」(a)という発問から、東久邇宮内閣総辞職後、GHQ・日本政府双方とも混乱なく改革を進行させるための関係を理解させた。次に、「皇族の東久邇宮稔彦内閣はなぜ総辞職をしたのか、総辞職したときの東久邇宮稔彦の気持ちを考えてみよう」(b)という発問から、日本の政治家が終戦後、民主的な精神をもったわけではなく、指導者の中にはGHQの迅速な改革や民主的な考えを全面的に受け入れられない者もいたことを考察させた。図2は、ワークシートに記入した生徒の考えの一つである。

さらに、「なぜ、天皇の人間宣言を出したのか」(b)という発問から、戦前、戦中の日本の社会と、戦後の日本の社会を比較して考えさせた。しかし、日本の指導者側からの占領期へのアプローチは、日本の指導者が出来事の主体になる場面が少なく、日本の政治家の立場から占領期の時代や改革を捉えイメージすることが難しそうだった。

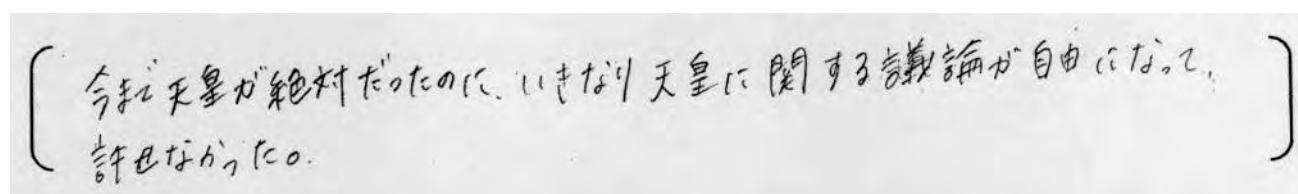


図2 生徒の記述①

第2時の民主化政策の学習では、「なぜ、GHQは日本政府に労働組合の結成を奨励したのだろうか」(a)という発問から、労働組合結成など労働者の権利が定着したことが戦後の新しい国づくりにどのように寄与していくかを考察させた。次に、「戦前の農地や農家にはどのような

特徴があるか」(d)という発問により、農地種別の割合や自小作別の農家割合に関するグラフを用いて、農地改革の必要性に迫っていった。また、「戦前の農家の暮らしぶりを想像してみよう」(c)と発問し、戦前の農家の貧困の様子や寄生地主制のもとに戦前の農家が存立し得た状況を理解させた。そして、「農地改革の結果、日本の農業や農家はどのように変わったか」(e)という発問では、グラフをもとに農地改革以前と以後の農家の経営の様子を比較するとともに、農地改革の成果を理解した。

戦前の財閥の在り方については、「なぜ財閥解体が行われたのか」(a)という発問から、資料集を使って、財閥解体の必要性、財閥解体の経過や意義について考察させた。

教育制度の自由主義的改革については、墨塗り教科書、公職追放や教育基本法などを参考資料として、戦中と改革後の教育が様変わりした様子を捉えやすいような資料を用いた。その結果、「日本の教育は戦中と戦後でどのように変化したか」(e)という発問に対して、ほとんどの生徒が、図3のような答えをワークシートに記入した。

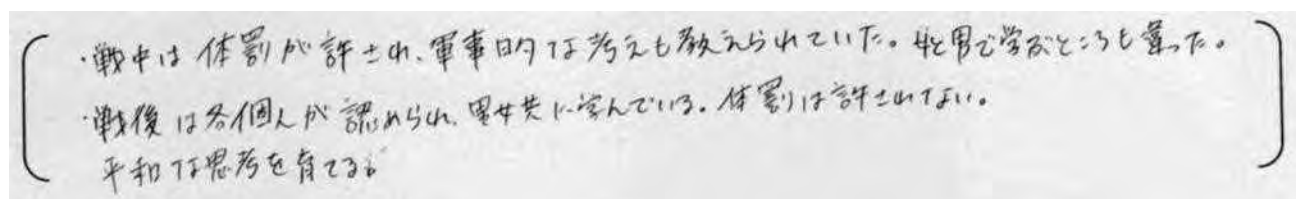


図3 生徒の記述②

第3時の政党政治の復活の学習では、「戦後初の総選挙を行うに当たって、GHQはなぜ選挙法改正や公職追放を指令したのか」(a)という発問から、GHQが展望する政治や選挙の在り方を考察させた。

第4時の日本国憲法の制定の学習では、旧憲法の条文を見ながら特徴を押さえた上で、憲法改正を行う必要性を確認し、「戦前の大日本帝国憲法と政府の憲法問題調査委員会が作成した憲法草案(松本試案)を比較して、どんなことがいえるか」(e)という発問から比較、考察させ、「松本憲法はどのような国を目指して憲法草案を考えたのか」(b)という発問から、GHQが占領後も戦前の天皇を頂点とする国家体制を簡単に放棄できない日本の政治家の考えを理解させた。そして、「新憲法(日本国憲法)の内容から、GHQは日本をどのような国家にしようとしたと思うか」(a)という発問を考えさせることによって、新憲法の特徴を見だし、憲法改正の過程を多面的に考察させた。

第5時の生活の混乱と大衆運動の高揚の学習では、教科書や資料集の写真や当時の新聞記事を用いて、「終戦後の日本国民がどのような暮らしをしていたのか」(c)という発問から、終戦直後の国民の生活を理解させた。また、「食糧メーデーや二・一ゼネストなどの大衆運動はなぜ起こったのか」(d)という発問から、大衆運動が起こった必然性や背景を考察させた。

GHQの視点からの発問では、戦後改革の主体となる立場から考える学習活動だったため、大半の生徒がイメージをつかみ、時代背景を踏まえた論理的な意見を出すことができていた。因果関係に焦点をあてて、改革や出来事が起こる原因をしっかりと把握し、結果を理解することで、改革や出来事の歴史的意義が認識できた。第1次の授業で行った、比較や関係付けによって、改革や出来事の変化を鮮明にするとともに、複数の事象の共通点や相違点を見付け、思考力を高める学習として、有効な学習活動になった。(第1次で使用したワークシートは、栃木県総合教育センターホームページ「教材研究のひろば」掲載の資料)

(2) 第2次

第2次には、本単元のまとめの学習の場を設定した。ここでは、「GHQや日本の指導者や国民はそれぞれ、どんな国家をつくろうとしていたのか（どんな国家にしたいと願っていたか）」をテーマに、これまでに学習した様々な改革や出来事を総体的にまとめる学習を行った。習得した知識を活用して比較、分類、関係付け、理由付けをしながら課題を追究することにより、これまでの学習をより深化することができ、歴史的様相に対する考えや意見を加味して自分なりの歴史観をもつことができると考えたからである。その際、話し合いを通して、互いに学び合うことで知識や考えをより深めることもねらいとして、グループ学習を取り入れた。（図4）

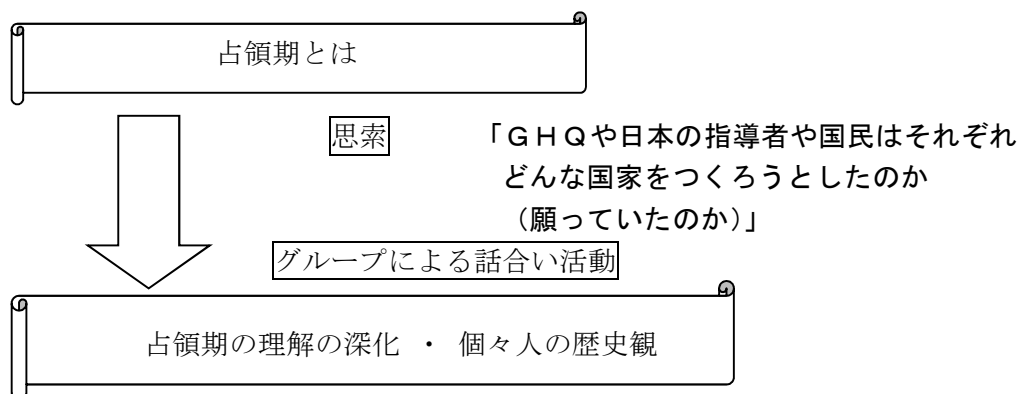


図4

第6時は、占領期にGHQ、日本の指導者、日本国民がそれぞれどのような改革や活動、生活だったかを振り返る活動を行った。そして、記入したことをもとにそれぞれが「どんな国家づくりを目指していたか（願っていたか）」を考えさせた資料。その際、「〇〇なねらいのもと、××の改革を行ったり△△を実施したりしたので、□□な国家を建設しようとしていた」という「根拠」をもって自身の考えを記入するように指導した。例えば、人権指令と労働三法から「民主的な国家づくり」を連想するなど、改革や出来事を二つ以上の事象と関係付けて、国家づくりに対する考えや意見の根拠を理由付けることによって思考力を高めることを主眼とした。また、根拠を示すことで、筋道を立てて考えを説明する力を身に付けさせようというねらいもあった。

生徒は、第1次で使用したワークシートを見返しながら記入した（図5-①、図5-②）。問1「GHQが行った改革」、問2「日本の指導者が行った活動や動き」、問3「国民の活動や生活の様子」については、スムーズに記入することができた。しかし、問4、問5、問6のGHQや日本の指導者や国民がそれぞれどのような国家にしようと考えたかを記入することには、時間が掛かった。問1、問2、問3で挙げた多くの事象の中から、どの事象が最も有効であるか、どの事象とどの事象が関係付くのか迷っていた。また、日本の指導者がどのように考えたかを考察することが難しかったようである。第6時にワークシートの全ての項目を記入することができなかった生徒に対しては、第7時までの課題とした。

問1 GHQが行なった改革や指令を振り返って記入しよう

第一歩 農地改革 教育の改革 (新教育法、学校教育法、初等教育法、中等教育法、職業教育法) 財閥解体 労働組合の育成 五ヶ年計画 社会主義の育成 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問2 日本政府や政治家など、日本の指導者が行なった活動や動きを振り返って記入しよう。

第一歩 農地改革 財閥解体 労働組合の育成 五ヶ年計画 社会主義の育成 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問3 国民の活動や生活の様子を振り返って記入しよう。

二・一ゼネスト 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問4 終戦当時、GHQは日本をどんな国家にしようと考えていたと思いますか。

歴史的出来事などを根拠に答えてください。

日本国憲法公布、施行、政党の復活、天皇の人間宣言を通して、国民中心の国にしようとした。(主権在民、天皇がほとんどの権限をもち、天皇中心の国だった)

問5 終戦当時の日本の指導者たちは敗戦後の日本をどのような国にしようとしたかと思いますが、歴史的出来事などを根拠に答えてください。

日本国憲法公布、施行、政党の復活、天皇の人間宣言を通して、国民中心の国にしようとした。(主権在民、天皇がほとんどの権限をもち、天皇中心の国だった)

問6 敗戦後の国民はどんな国になってほしいと考えていたと思いますか。

歴史的根拠などをとらえてください。

二・一ゼネストや食糧メーデーを起すことによって、労働者が主導権を握って、貧しい生活から抜け出そうとした。資本家も労働者も平等に貧しくない国になってほしいと思っていた。

財閥解体を行って、市場の不平等をなくし、安定させようとした。

憲法草案を作成したり、教育改革をしたりすることによって、戦争のない平和で民主的・文化的な国にしようとした。

日本国憲法公布、施行、政党の復活、天皇の人間宣言を通して、国民中心の国にしようとした。(戦前は、天皇がほとんどの権限をもち、天皇中心の国だった)

二・一ゼネストや食糧メーデーを起すことによって、労働者が主導権を握って、貧しい生活から抜け出そうとした。

資本家も労働者も平等に貧しくない国になってほしいと思っていた。

図5-① 個人で作成したワークシートの一例

問1 GHQが行なった改革や指令を振り返って記入しよう

第一歩 農地改革 財閥解体 労働組合の育成 五ヶ年計画 社会主義の育成 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問2 日本政府や政治家など、日本の指導者が行なった活動や動きを振り返って記入しよう。

第一歩 農地改革 財閥解体 労働組合の育成 五ヶ年計画 社会主義の育成 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問3 国民の活動や生活の様子を振り返って記入しよう。

二・一ゼネスト 労働者の権利 労働者の権利 労働者の権利

問4 終戦当時、GHQは日本をどんな国家にしようと考えていたと思いますか。

歴史的出来事などを根拠に答えてください。

日本国憲法公布、施行、政党の復活、天皇の人間宣言を通して、国民中心の国にしようとした。(主権在民、天皇がほとんどの権限をもち、天皇中心の国だった)

問5 終戦当時の日本の指導者たちは敗戦後の日本をどのような国にしようとしたかと思いますが、歴史的出来事などを根拠に答えてください。

日本国憲法公布、施行、政党の復活、天皇の人間宣言を通して、国民中心の国にしようとした。(主権在民、天皇がほとんどの権限をもち、天皇中心の国だった)

問6 敗戦後の国民はどんな国になってほしいと考えていたと思いますか。

歴史的根拠などをとらえてください。

二・一ゼネストや食糧メーデーやストライキを見て、平等な国になってほしかったのではないかと思います。

公職追放で、戦争に積極的だった人たちが公職につくことを禁止したり、戦争指導者を逮捕したりして、戦争のない国をつくりたかった。

農地改革で、貧しい人が減り、自分の土地をもつ人が増え、労働三法で労働者の負担を軽くして、貧富の差を少なくしたかった。

天皇中心の国。
憲法をあまり変えなかった。

二・一ゼネストや食糧メーデーやストライキを見て、平等な国になってほしかったのではないかと思います。

図5-② 個人で作成したワークシートの一例

第7時は、第6時に個人で考えたものをより深化させるために、グループでの話し合い活動を行った。

「GHQや日本の指導者や国民はそれぞれ、どんな国家をつくろうとしていたのか（どんな国家にしてほしいと願っていたか）」を第6時に個人で考えたワークシートの記述をもとにグループで話し合い、模造紙に記入させた（図6）。研究実践を行った学校の生徒は、話し合い活動の当初は、控えめな様子が見られ、なかなか意見交換が行われなかった。そのため、机間指導を行い、グループのメンバーの共通する考えやキーワード、根拠となる改革や出来事を見付けていくよう支援した。例えば、「終戦当時、GHQは日本をどんな国家にしようと考えていたか。」というところでは、生徒たちのワークシートの中には「豊かな」「平和な」「戦争のない」という語句があったことから、そのグループにはそれらの語句を中心に考えるように助言した。生徒は、話し合いを始める糸口をもつことにより、徐々に意見を出し合うようになった。

模造紙には、意見をまとめたり表現したりしやすいように、「GHQは日本を_____な国にしようとしていた。なぜなら、_____」という表現を設定して示した。どのグループも、根拠とする改革や出来事は、GHQが目指す国家のところでは、公職追放、農地改革、労働組合結成、労働三法、教育基本法などをもとに、どのような国家を目指していたかを考えていた。日本の政治家が目指す国家では、天皇の人間宣言、政党復活、消極的な憲法改正を根拠として考え、国民が願う国家のところでは、買出し、闇市、食糧メーデー、二・一ゼネストなどを根拠にしていた。これは、第1次の授業で様々な立場から考察した結果を根拠として考えられたものである。

全てのグループの模造紙が完成した後、各グループの考えをよりよくするために、他のグループの生徒がその模造紙を見て、付箋紙に助言を記入し貼るように指示した。緑の付箋紙には「『どのような国家を目指していたか』のところに、こんな言葉も入れれば良い意見・考えになる」というアイデアを、青の付箋紙には「『なぜなら』のところに、こんな出来事や改革をいれたら、根拠に説得力がでてくる」というアイデアを記入させ、貼付させた。生徒は自分のワークシートや自分のグループの意見を確認しながら、積極的に付箋紙に記入し、模造紙に貼っていった（図7）。



図6 グループ活動の様子

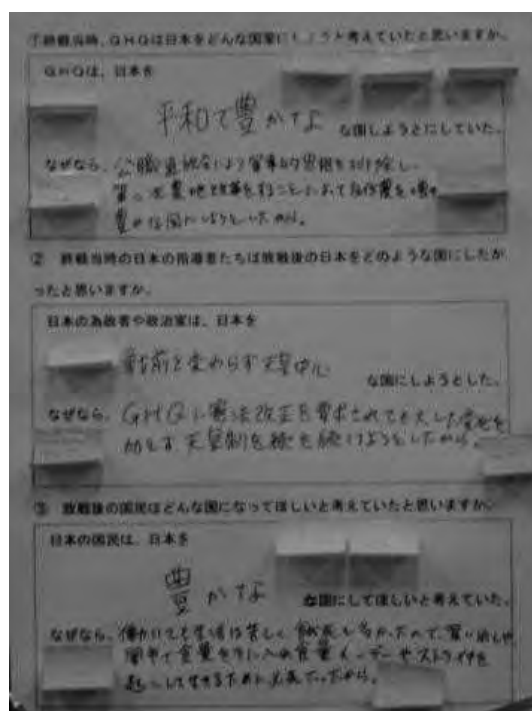


図7 付箋紙を貼った模造紙

「GHQは日本を 戦争をしない平和 な国にしようとしていた。なぜなら、 公職追放で再び戦争が起きるのを避けたから。」

図 8

図 8 は、グループ C の GHQ が目指した国家の在り方の記載である。他のグループから「豊か」「国民が自由と平等で過ごせる」「国民主権」などの言葉を傍線部に入ればもっと具体的な意見になるとして、緑の付箋紙が貼られていた。同様に、点線部を改善するために「教育改革で戦争や平和に対する考えを変えていった」「新憲法で戦争放棄の項目を入れた」などと青の付箋紙が貼られていた。そして、自分のグループに戻り、付箋紙が貼られた自分のグループの模造紙を見て、振り返りを行った。

その後、全てのグループの模造紙を黒板や壁に掲示し、全員で振り返り活動を行った。ここでは以下の 3 点に注目させた。

1 点目は、同じような歴史観でも異なった根拠から構成されることがあることである。グループ A (図 9)、グループ B (図 10) だけでなく他のグループも、GHQ が目指した国家の在り方の一部に「平和」が含まれていた。しかし、「平和」な国家をつくろうとしていた根拠が各グループで異なっていた。

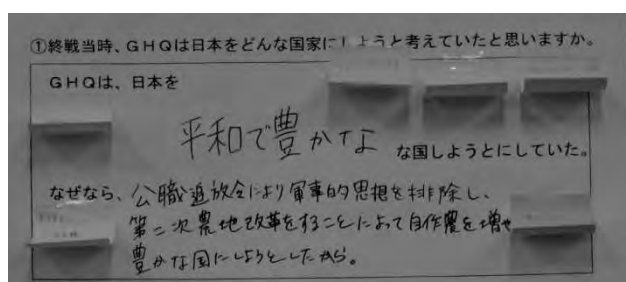


図 9 グループ A の意見

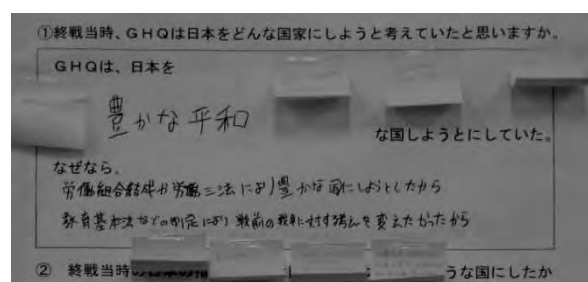


図 10 グループ B の意見

グループ A は公職追放によって、社会に影響のある職業から軍事的な思想をもっている者を排除している点を「平和」の根拠としているのに対し、グループ B は教育基本法など教育の自由主義的改革で戦前の戦争に対する考え方を変えたことを「平和」な国家を建設しようとしていた根拠としている。他にも緑の付箋紙には戦争放棄、軍需産業の禁止などが貼付された。このことから、共通した歴史観（ここでは「平和な国家建設」）でも、根拠となるものが異なることがあることを確認することができた。

2 点目は、根拠が変わると歴史観も全く異なることがあることである。「日本の為政者は戦後の日本をどんな国にしたかったのだろうか」という発問に対しグループ A は、憲法問題調査委員会が大日本帝国憲法とほとんど変わらない憲法草案を作成したことを根拠に「戦前と変わらず天皇中心」の国家づくりをしたかったと答えた (図 11)。グループ C は、天皇の人間宣言を根拠として、天皇の神格を否定し「国民の意見を取り入れる」国家づくりと答えた (図 12)。それぞれのグループの意見は国家づくりの方向性が違っており、根拠とすることが異なることで歴史観が変わってくることがあることを確認することができた。

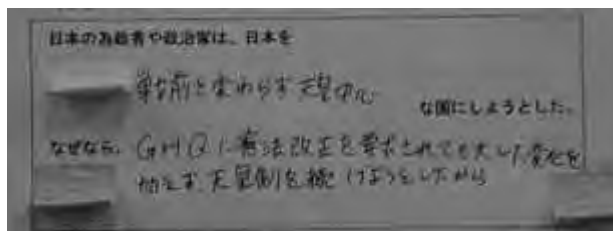


図 11 グループAの意見

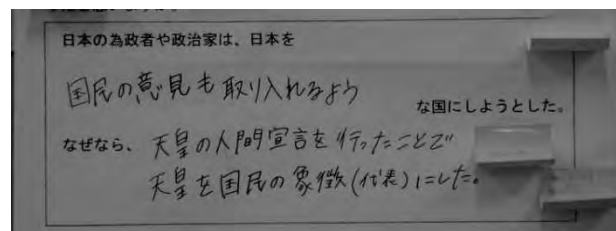


図 12 グループCの意見

3点目は、アプローチの仕方が違っても、同じ結論に至ってくることである。グループAの模造紙の中では、GHQも日本の国民も「豊かな」国家建設を目指していた（望んでいた）と答えている。主体（GHQや日本国民）が異なっても、根拠とすることが違っても、この時代の歴史観として「豊かな」国家建設というのが大部分を占めていることを確認することができた。

最後に、今まで学んだことを振り返って、「占領期とはこんな時代だ」という題のもと、占領期についてまとめた。ここでも「根拠」を明確に示し自分の意見を述べるように支援したところ、ほとんどの生徒が根拠をもって自分の意見を記述することができた（図13）。

占領期とは、GHQの指示で、みんな平等で平和な国づくりを目指した時代だと思いました。

GHQは、財閥解体や農地改革を行い市場や農業の貧富の差を無くそうとしていたと思います。そして、公職追放を行い、戦争に関する知識をもつ人を国民から遠ざけ、戦争賛成派の意見に影響される恐れを無くし、戦争のない平和な国をつくろうとしていたと思いました。

日本の国民は、安定した生活が送れるような国をつくってほしかったと考えました。食糧メーデーや二・一ゼネストを起こすことで意見を主張しました。

よって、占領期とは、平等で平和な国づくりを目指した時代だと思いました。その一方で、一部の国民は、とても貧しい生活を送っていた時代でもあると思いました。

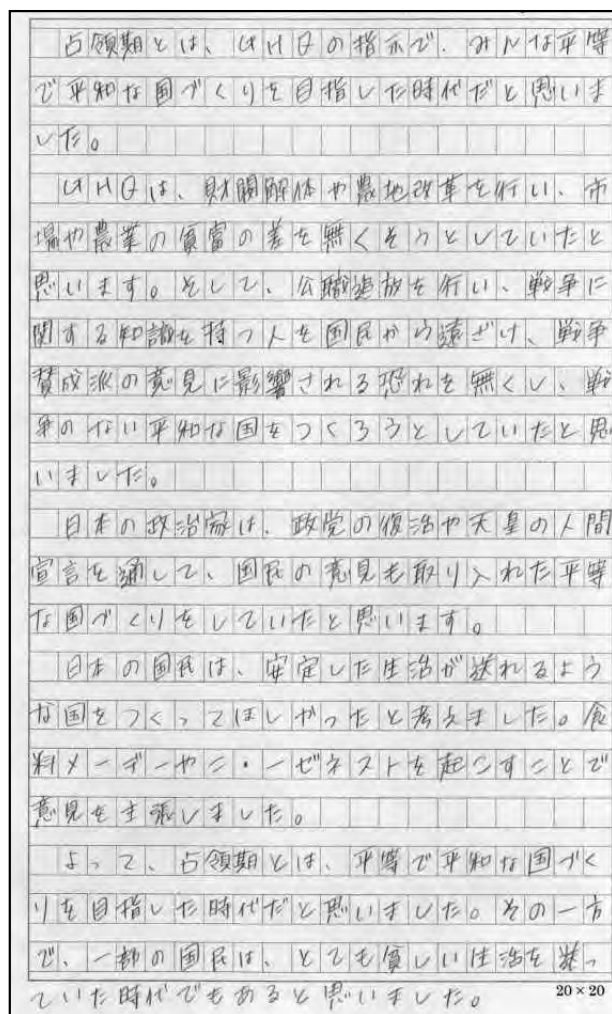


図 13

生徒の記述の一例

4 成果と課題

(1) 成果

授業を実践するに当たり、様々な立場から占領期について考えられるように、発問やワークシートを工夫した。教科書やワークシートの資料を比較し、関係付けて、GHQの立場からだけでなく、日本の指導者、日本国民の立場でも占領期を考えることができた。また、単元のまとめでは、これまでの学習内容を踏まえた上で、根拠を挙げて考察し、表現することができた。さらに、グループで意見交換した上で付箋紙による生徒同士の相互評価を行うなど、他者の考えと交流することで、占領期についての考えを深化することができた。単に起こった事象を並べるのではなく、物事を比較、分類させ、出来事の因果関係を多面的・多角的に考察させることにより、歴史の様相を豊かにイメージさせることができ、知識・理解はもとより、根拠をもって歴史の様相に対し言及できる力も養うことができたものとする。

事後アンケートによる生徒の自己評価（図14）では、人物の気持ちや歴史的な出来事の原因・意義を考える力の定着、歴史的出来事への興味・関心、歴史的な出来事や時代について自分の意見や賛否をもつ力が身に付いたと答える生徒が多く見られた。歴史を多面的・多角的に考察する機会を多く取り入れた今回の実践は、生徒の評価が高かった。

質 問 内 容	そう思う	どちらかといえばそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
歴史的な出来事や人物の気持ちなどを考える力は身に付いたと感じたか	18.8%	62.5%	18.8%	0.0%
占領期とはどのような時代だったか、考えをもてるようになったか	37.5%	62.5%	0.0%	0.0%
歴史への関心が高まったか	25.0%	68.8%	12.5%	0.0%
その時代の様相や出来事に自分の意見や賛否を述べられるようになったと感じたか	12.5%	62.5%	25.0%	0.0%

図14 アンケート項目とその結果（抜粋）

(2) 課題

『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』では、「現代の日本と世界」の内容とその取扱いに「現代の社会や国際環境と関連付けて考察させ、世界の中での日本の立場について考察させる。」とある。そのため、この時代を学習する際に、例えば、日本の占領期とドイツなどのヨーロッパ諸国の戦後を比較して考察させることも考えられる。現代を学習する上では、日本と世界との関わりを示す資料なども取り入れ、国際環境と関係付けることで、多面的・多角的に考察させることができ、国際社会の変化を踏まえて、公正に判断する力を付けることができると考える。

〔参考文献等〕

- ・文部科学省検定教科書『詳説 日本史B』（山川出版社）
- ・『ビジュアルワイド』（東京書籍）
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成22年）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 地理歴史科】』（平成24年）
- ・『少年少女 日本の歴史 ⑨ 現代の日本』（小学館 平成10年）
- ・武藤直大『新聞記事に見る激動近代史』（グラフ社 平成20年）

占領期の国家形成への願い

問1 GHQが行なった改革や指令を振り返って記入しよう

[]

問2 日本政府や政治家など、日本の指導者が行なった活動や動きを振り返って記入しよう。

[]

問3 国民の活動や生活の様子を振り返って記入しよう。

[]

問4 終戦当時、GHQは日本をどんな国家にしようと考えていたと思いますか。
歴史的出来事などを根拠にして答えてください。

[]

問5 終戦当時の日本の指導者たちは敗戦後の日本をどのような国にしたかったと思いますか。
歴史的出来事などを根拠に答えてください。

[]

問6 敗戦後の国民はどんな国になってほしいと考えていたと思いますか。
歴史的根拠などをもとに考えてください。

[]